

日本アイアイ・ファンド (NAF) 活動報告 (最終ひとつ前)

2025年～2026年2月



子どもたちは力の源 2026年2月13日、アンジアマンギラーナ村

ラミーの苗木1,000本を川辺に植えに行く子どもたち。

2025年1月にチンバザザ公園とスアピナ事務所で集められたラミーの種子のうち1,500個は、マジュンガ大学に送られて「国際ラミー植林プロジェクト」チームが結成されました。しかし、マジュンガ地方では4月から11月の間の乾季には苗を育てるための水がないので、2025年もラミーの苗木を生産する拠点はアンジアマンギラーナ村クラニ苗畑となりました。子どもたちが歩いているのは、マナサムディ山を後ろにして、村の東を流れるアンジアマンギラーナ川へ行く道です。



上写真：植樹作業中の子どもたち（左）とお菓子が配られるのを待っている子どもたち。

2025年9月以降に集められたチンバザザ公園とスアビナ事務所のラミーの種子約5,000個は11月にアンジアマングラーナ村の苗畑に運ばれ、2026年2月には発芽した約4,000本のラミー苗のうち1,000本を地元の川辺に植えたのですが、その植樹の主力は子どもたちでした。

これにはちょっとした秘密があります。村長や小学校長とアイアイ・ファンドのアジャさんの発案で、当日参加した子どもたちには飲み水とお菓子とあめ玉が配られたのです。この「グッドアイデア」は「国民植林の日」を子どもたちのお祭りに変え、植林の日当を子どもたちの喜びに変えることができました。

2026年2月、アンジアマングラーナ村には苗畑の看板が立てられ、そこで育成されたラミーなどの苗木合計4,000本はマジュンガ大学ヘトラック輸送されました（下写真）。



道路事情はこの10年間に悪化の一途をたどり、アンジアマングラーナ村からマジュンガ大学まで苗木を運ぶのは二日かかりとなりました。苗木を暑熱から守るためには車内冷房が不可欠で、4,000本（ラミー3,000本、マンゴー500本、ジャックフルーツ500本）の苗木を運ぶためには2台の車が必要でした。運搬車の車内には何段にも積みこむための仕切りと棚が即席で作られたのですが、この積みこみと輸送には想定以上の時間と費用がかかることになりました。



マナサムディ山地の植林地（2026年）では、林の中の二人の人影（赤枠内）が小さく見えるほどアカシアの木々が大きくなりました。同じ年に植えたラミーはまだ人の背丈の倍ほどでしかありませんが、しっかり根付いています。（写真上と左：2026年2月12日）

今年植えたラミーも、この子たちが大人になった時

には見上げるほどの林になっているはずです。（写真右：2月13日）

アンジアマングラーナ村への国道の状態は 2025 年にはほんとうに悪くなり、「雨季の三か月は通過不能」と言われた 1980 年代とほとんど同じになりました。アジャさんは悪路を克服して種子を運び、苗を運んでくれましたが、今後は雨季にアンジアマングラーナ村での苗を各地に運ぶのは無理になると思われます。この時に、マジユンガ大学で苗畑と植林地が提供されたのは実に幸運でした。

2025 年を振り返ると

「2025 年 1 月 25 日、ラミーの木の下に行く。そこでラミーの果実が貯まっているのを見つけた。とにかく膨大な量の果実がある」と日誌にあります。その「膨大な量」とは「1,504」でした。2010 年に赤松さんが集めたのは 5,350 個のラミーの種子で、それがラミー



ーの育種の始まりでした。「ものごとは 1,000 を超えたところから、始まる。やはり、水がたっぷりある場所、暑い場所がいちばんいい。それはマジュンガだ。チンバザザ公園からマジュンガ大学に交渉して、苗畑を協同管理し、それを全国に広げる」と意気こんだのは、とうぜんでした。これは一つの奇跡でした。

マジュンガ大学で「国際ラミー植林プロジェクト」チームが結成され、植物園では直ちに苗畑が作られました。(写真上：4 月 24 日)

4 月 10 日、星槎つつじ中学校に寄付の礼状を送りました。この札幌の中学校の生徒たちは文化祭でマダガスカルを特集し、そこで集めた寄付金を日本アイアイ・ファンドあてに贈ってくれたのです。私たちの活動が若い人たちに選ばれたことは大きな誇りです。

4 月 14 日、国土緑化推進機構へ申請したプロジェクトの目的がはっきりしないという質問。そこで回答。**事業名**マダガスカル固有樹種ラミーの母樹基地形成と苗の配布・植林、



事業目的マダガスカル西部の自然林を回復するために、固有種ラミーの母樹基地を形成し、その苗木を配布して国の植林事業に参加する。

7 月 1 日には国土緑化推進機構からこの事業について交付金支援決定通知がありました。

この「ラミー母樹基地プロジェクト」の英語名を Mother Tree Base Project for Ramy (マダガスカル語名 Ramy Renin Kazo Project)としました。

スアビナ事務所のラミーの結実とその種子収集は月毎に報告されましたが、5 月時点では 1,000 個に迫るほどになってい

まし。
(写真左：スアビナ事務所のラミー種子 940 個、5 月 16 日)

一方日本では、2025年夏には、ラミーの種子が島（7月1日）と赤松さんの自宅（8月9日）で芽吹きました。ラミーNo.1 芽吹き。発見が遅れて日に曝されて子葉が茶色に変色していたので日陰に救助。7月7日、ラミーNo.2 芽吹き。7月10日、ラミーNo.1 枯れる。



（左写真：8月1日 No.4 ラミー苗。）

こうして芽吹いては枯れ、ということを繰り返し、11月6日には下関から上京していた高校同期の倉田修三さんに宇部市ときわ公園に届けてもらうためにラミーNo.3を手渡しました。

倉田さんには届け賃として東京駅構内豪華カフェでコーヒーをおごりました。倉田さん曰く「あんたにおごってもらったのは、これが人生初じゃ」。（最後かも）

翌日、倉田さんはときわ公園で係の村田さんにラミーを手渡し、またコーヒーを頂いたとのこと。こうして、わが家で育ったラミー5本のうち4本は枯れ、1本は宇部市で育てられ、赤松邸宅では南向きの豪華な部屋でラミー苗4本が複葉まで展開して元気で冬越ししています。小規模ながら赤松さんによる2010年のラミー育種の再現です。

9月10日、日本での極小規模のラミーの発芽実験とかかわりなく、マジュンガでは順調にラミーが発芽していました。10月17日、マジュンガ大学では種子1,000個から280本、アジャ・ママさん苗床500個から110本、合計390本の苗ができていました。しかし、…2025年のマダガスカルは2009年に続く政変の年となりました。

マダガスカルからの第一報は9月の末にララー家から「電気と水道が供給されないことで、大学生たちが抗議のデモをしている。市内の一部でスーパーマーケットの略奪もあり、郊外のタンジョバトでも略奪が始まった」というものでした。デモは9月25日に始まり、政府の腐敗や悪政、国民への基本的サービスの欠如への広範な不満を背景に大規模な反政府デモへ発展しました。10月11日、ラジョエリナ大統領が2009年に権力を掌握した際に支援した軍精鋭部隊CAPSATの兵士らは大統領の命令に従わず、デモ参加者への支援を呼びかけ、10月12日にはラジョエリナ大統領はフランス軍用機で国外に脱出しました。

10月17日にはクーデターを起こしたランディアニリナ Randrianirina 大佐が大統領に就任しました。「ランディアニリナ大佐は2023年11月にはラジョエリナへの批判的な言動のため、反乱を扇動したとして裁判なしで投獄され、2024年2月に学生団体や一部の兵士、政治家の抗議で釈放された。（アンタナナリヴ=今泉奏、朝日新聞10月17日23:30配信）」

この間にもラミーの種子の収集と苗畑整備は順調に進みました。

ラミー種子の収集実績 2025年および2024年との比較

	2025年	10月30日（11月5日）	2024年
スアビナ事務所	1,187	(1,187)	97
チンバザ公園	3,900+	(4,243+)	1,504
アンジアマングラーナ	2,500+	(3,000+)	
合計	7,587+	(8,430+)	1,601

2025年12月16日、『物語マダガスカル』(中公新書)執筆中。「半分は人の歴史ですよ」と編集者に念を押され、ひとつひとつが勉強の日々です。そのひとつは孫に教わった翻訳ソフト DeepL の使い方で、もうひとつは下関西高同期の近藤弓子さんから教えてもらった江端希之の『躍動する聖地』(春風社)です。「これを知らなかったらマダガスカル人については語れない」ほどの本です。



この年末もうひとつの重大事件が！酒井雅義さんが2月にマダガスカルに来ることが決定！

写真：スアビナ事務所のラミーの日陰でバオバブの種子を取り出してご満悦の酒井さん(2月19日)。

酒井さんは学生時代にはスウェーデン人とただ二人でコンゴ川 1,600 キロを漕ぎ下り、その後ジャイカの一員として、奥さんと二人三脚でアフリカ諸国を巡り歩いてきた方です。「2週間だけです。長いのは嫌ですよ」と言いながら、マダガスカルまで自費で来ていただけたのは、ありがたいことの極みです。しかも、2週間弱のマダガスカル滞在のあと、酒井さんは「ラミープロジェクトをやめてはいけません。次回、次々回は私も2週間と言わず、2か月でも来て手伝いますから」と。いや、それは！……

2026年のラミーたち



つたオスのラミーの木です。



スアビナ事務所(緑のベランダ)のラミー群は家の右に2本、左に4本のラミーがあり、家の右のラミーのうち手前のラミーも2025年12月に開花しました2026年2月19日(上右写真)。左写真で酒井さんが手を広げている後ろの木が結実しているラミーです。その左は花の終わったオスのラミーの木です。

2026年2月時点でラミーの結実はスアビナ事務所とチンバザザ公園で5,000個以上です。



チンバザザ公園のラミーの結実です（2月19日）。

アンブヒジャヌ「マダガスカルで一番美しい村造り」植林地のラミー



アンブヒジャヌ植林地のラミーの林は上空から見ると松の木やマンゴーの濃い色に負けてはつきりしません（上写真の中央で上下に走る道沿いの右側）が、一歩中に入るとまっすぐな幹と浅い緑の並木を作っているのが分かります（下写真：2026年2月16日）。

首都郊外のアンブヒジャヌでは2010年から2011年に植えた50本のラミーが16歳になり、あと10年以内に結実するでしょう。

マジュンガ大学との協力

マジュンガ地域はマダガスカル島の北西部で、左写真の右上にアンジアマンギラーナ、左端の中央にマジュンガ市があります。アンサンティア植林地はマジュンガの北東約 20km。



マジュンガ大学博物館（手前の平屋）と大学正門（右奥林内：2026年2月14日）大学の正門から博物館までをラミーの並木、博物館のまわりをラミーで囲む計画です。



白い看板の先の白い門が大学正門です。学生たちが植樹作業中です（2026年2月14日）。



マジュンガ大学学長と会見
（2026年2月13日）左から植物園
の Herimalala Raveloson 博士
Blanchard Randrianambinana
学長、私、元チンバザザ公園動物
園長のジルベールの娘さん
Volatia Randrianasolo 学長秘書、
酒井雅義さん、右端が Haja
Rajonson さん。



学長との会見の翌日、いっしょに給水塔設置場所で鍬入れしました（学長のほうが腰が入っているなあ）。3月には給水塔の土台が完成しました（右写真）。

アンサンティアではマダガスカル政府から環境活動を委託された村の VOI (Vondron'olona ifotony)が植林を行いました。



アンサンティア植林地 (47 ヘクタール) のドローン映像 (2026年2月14日)。2,000もの穴を掘って、ラミーの植樹が行われました。



アンサンティア植林地 (2026年2月14日) でラミー苗へのサッチャナヤシの覆い。



ここはまったく平らな海岸付近の地形です。手前が植林地で、かなたの緑の一角はアンサンティア・リゾートです。この地域で森林形成ができるという見本です。

将来のために

チンバザザ公園での苗畑は、2025 年中には整備されませんでした。2026 年には実現するでしょう。公園の整備のためにトラクターのタイヤを要望されていたので、贈呈することにしました。



スアビナ事務所から運びだされたトラクタータイヤ（前輪と後輪）をチンバザザ公園園長（右）に贈呈（2026年2月19日）。



マジュンガ大学植物園給水工事に水ポンプと電線一式を購入（2026年2月26日）。

マジュンガ大学ではこれを使って、苗畑の灌漑ができることとなりますが、井戸掘りは2026年6月です。乾期の最中でなければ井戸は掘れないので、年度をまたいでの仕事となりました。

ラミー母樹基地プロジェクトの将来構想について

スアビナの庭にラミーを植えてから四半世紀の間、マダガスカルーの高木に果実がつくのをお待ちしていました。今では、年間一万個のラミー種子を収集して、最低 5,000 本のラミー一苗を生産することができます。

将来計画は第一に、首都とアンジアマンギラーナ苗畑を維持、拡大し、ラミー種子・苗を監視森林の周辺村落 5 コミュニティ（10 フクンタニ=村）に配布すること。第二に、ラミーの種子生産の母樹基地を中央高地 3 カ所（チンバザザ公園、スアビナ、アンブヒジャヌ）、西海岸 2 カ所（アンジアマンギラーナ村クラニ苗畑、マジュンガ大学植物園苗畑）、東海

岸 1 カ所（トゥアマシナ大学植物園か、ブルノー私有地？）合計 6 カ所に設置すること。第三に、これらの母樹基地からラミーの種子・苗の頒布をマダガスカル全土に拡大することです。このプロジェクトはさらに「カヌー建造プロジェクト」に続き、3 年後には、あるいはいつの日か、大きくなったラミーを使って、遠洋航海用のアウトリガーカヌーを建造するかも。



マジュンガ湾口早朝：アウトリガーカヌーの船団が思い思いの帆を張って、魚捕りに船出します。

「マダガスカルでは約 3 千万人の人口があり、国民の年齢の中央値は 20 歳未満で、国民の 4 分の 3 が貧困状態にあり、世界銀行の統計によると 2020 年の 1 人当たりの国民総生産（GDP）はフランスから独立した 1960 年から 45%も減った。」（ロイター、2025 年 10 月 16 日 8：11 配信）

マダガスカルではほんの少しだけ樹木を植える慣習が社会に根づくだけで、人々の生活はほんとうに豊かになるはずです。固有種は国宝です。1～2 月のナショナル・プランテーション・デー（国民植樹日）には学校や役場など公的機関は植樹をすることになっています。私たちが作り上げたマダガスカルの固有種ラミーの苗木をこの公の植樹事業に加えることで、この国の可能性が大きくなることを期待したいと思います。

「人生の短さとやりたいことはもともと折り合いがついているので、それに愕然とせず、最期までやるしかない。島さん、自分の描く、描いている夢に負けてはいけない。」（フランス、トゥールーズの相原芳樹さんから、80 歳目前の老体を嘆く島へ）

2025-26 年日本アイアイ・ファンド活動報告会は 2026 年 3 月 29 日（日曜日）

午後 2 時から、東京大学総合研究博物館 7 階会議室です。

日本アイアイ・ファンド 代表 島 泰三

〒113-0033 東京都文京区本郷 5-3-12-101

電話：03-3813-6578 メール：rrjqm547@ybb.ne.jp